

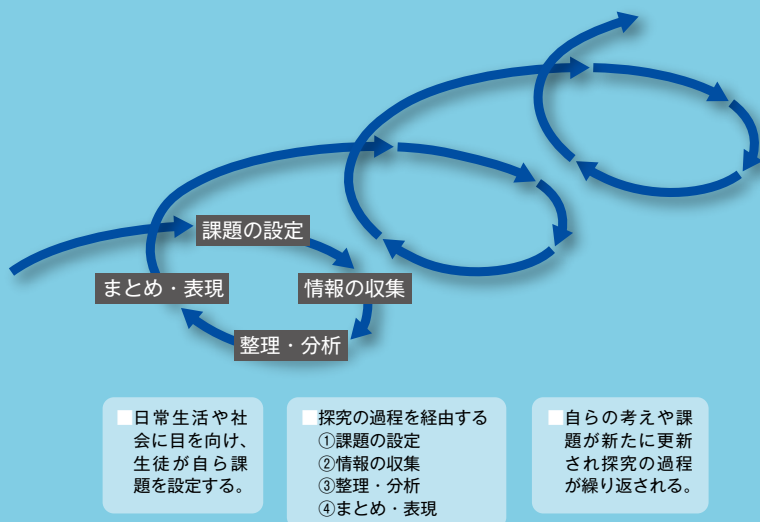
大学における 探究 2.0

CONTENTS

Interview	探究的学修成果の証明
Roundtable	なぜ教育に探究が必要か 独立行政法人教職員支援機構 荒瀬克己氏／認定 NPO 法人カタリバ 今村久美氏／株式会社ボーダレス・ジャパン 鈴木雅剛氏
Report	進む初等中等教育の探究 かえつ有明中・高等学校／熊本県立鹿本高等学校／青翔開智中学校・高等学校
Interview	探究による大学経営の新たな価値創出 桜美林大学学長 畑山浩昭氏
Report	探究の視点を発芽させる・伸ばす大学 立教大学／追手門学院大学／産業能率大学／島根大学
Editor in Chief's Perspective	編集長の視点

探究における生徒の学習の姿／高等学校

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説
総合的な探究の時間編より



●「探究学習」の目的

目標 探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身につけ、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、新たな価値を創造し、より良い社会を実現しようとする態度を養う。

前号特集「正解がない時代の「学びのデザイン」」に引き続き、本号でも大学における学びのバージョンアップに焦点を当てる。本号はとりわけ、初等中等教育で起こっているパラダイムシフトである「探究」を、大学はどのように捉えたらいいのか、という視点に軸足を置いた。

予測不可能な VUCA の時代、社会に存在する多様な課題を解決するために、翻って自らの人生を自律的に構築していくために、未知の事象に自分なりの「問い」を立て、それを起点に学びを設計し、主体的に学び進めていく探究スパイラルが、初等中等教育の現場で実装されつつある。新たな学習指導要領の根幹は、教育の主語が供給者から学習者へと移ったことだ。志望校の偏差値を見て訳も分からず過去問を解くような勉強ではなく、自分の興味関心から軸足を決めて自ら学びを設計する。教員はその伴走者として学びの最大化を支援する。そうした教育によって VUCA の時代を生き抜く子ども達を育てるとするのが全体の方向性だ。

探究の「究」は研究の「究」である。読者の中には、いよいよ大学が得意としてきた捉え方に近い教育が展開されるようになったと思われる方も少なくないだろう。確かに、

研究機関でもある大学にとって探究は親和性の高い概念である。

しかし、探究スキームは急に研究になり得るのかという、その答えは NO であろう。未知へのアプローチ方法やスタンスを学んだ生徒が、いかにそれを研究レベルに昇華できるのかは、大学の教育デザインにかかっている。また、探究活動に取り組んできた生徒が大学に入学した途端、探究的な学習がストップしてしまうのでは困る。いかに学生の学びを止めないのか。コロナ禍によく提唱された言葉だが、それは探究文脈においても当てはまる。探究世代を受け入れ、どのように育成し、どのような成果に結び付けていくのか。改めて問い直す必要があるだろう。

学生の問いに応じたオーダーメイドな教育をどう展開するのか。その推進をどう支援するのか。大学経営上の意義はどう定義するのか。過渡期だからこそ、丁寧な設計・接続が求められる。従来の研究を軸にした観念が「探究 1.0」とするならば、そうした接続も含め、現代化した「探究 2.0」はどのように構築されるだろうか。それこそが、新たな「選ばれる大学」の軸足になるのではないのか。

本特集がその探索の参考となれば幸甚である。



(イラスト/ノノメ)